

# 「日本」の「高校」野球というスポーツ ～投球制限問題より見えてくるもの～

## 1. はじめに

2019年、新潟県高等学校野球連盟(以後「高野連」)が選抜高校野球大会地区予選において投手への投球制限を設けることを発表した。しかし、日本高野連がその後新潟高野連に対して「再考を求める」という通達を出した。一体どのような懸念からこの一連の出来事が生じたのか、そしてその判断は果たして適切だったのか考えていきたい。

※今回はあくまでも1人の高校野球ファンとして考え方の1つを示すのが目的であり、私の意見に賛成していただくことは望んでいません。



## 2. 経緯

- ・2018/12/22 新潟県高野連、次回春季県大会限定で投手の投球数を1試合当たり1人100球までにすることを発表。
- ・2019/02/20 上記について日本高野連が再考を申し入れることを表明。
- ・2019/03/18 今春の新潟県大会での球数制限導入を見送ったことを正式に発表。

## 3. 考察

過去にも高野連は選手の疲労を考え、全国大会(以下、甲子園)で下記のルール変更を行ってきた。

- ・延長戦13回以降からタイブレーク制(無死1、2塁より開始)の導入(2018年度大会～)
- ・休養日の設置(2013年度大会～)

だが、私は**今回の投球制限は上記のルールと同列には扱えないと感じる**。以下に理由を挙げる。

- ・必然的に複数の投手が必要になるため少人数の出場校がより不利になる。(場合によっては試合にならない)
- ・勝敗に影響する規則については全国で足並みをそろえて検討すべきである。

(上記2つは再考を申し入れた日本高野連の主な根拠)

- ・相対的に選手層の厚い、所謂「強豪校」がさらに有利になる。

以上より私は、今回の日本高野連の判断は適切だと考える。では、子の出来事の何が問題なのか？ずばり、「**統一した方針の欠如**」と「**対応の遅さ**」である。今回は新潟高野連が独断(抜け駆け?)でルール変更に踏み切った。それだけ緊急の問題と考えたのだろう。しかし投球制限は、場合によっては野球のゲーム性を揺るがしかねないほどの大幅な変更である。最悪変えるか否かは別にしても、ルールを平等にして地区予選は執り行われるべきだ。また、このような「投げすぎ」問題は以前から顕在化していたはずである。その対応が遅れたのは、高校野球というスポーツが持つ特質を損なうまいとしたからであると考える。

## 4. 「日本」の「高校」野球の異質さ

### ・「怪物の熱闘(熱投)」への賛美

日本高校野球において、その大会を象徴するような大投手は「怪物」と表現される。怪物たちの中にはプロ野球界に進んでもその怪物ぶりを発揮した例も数多く存在することに間違いはない。しかし、高校時代にその力を使い切り、後の野球人生を不意にしてしまったという者も存在するというのも紛れもない事実だ。

### (4.続き)

(別表)からもわかるように、必ずしも怪物はプロ野球の怪物には必ずしも怪物はプロ野球の怪物にはなりえないのだ。選手の目線に立った時、彼らは本当の意味で怪物になる必要があるのか。その後の野球人生を引き換えに一時期の栄光をつかみ取っているのではないだろうか。凄まじい投球数の中、魂を振り絞って投げる高校球児の姿。高校野球ファンの方々ならいくつか場面が思い浮かぶのではないだろうか。しかし今一度考えてもらいたい。それは果たして本当に美しい風景なのか。以前なら「野球は高校まで」という位置づけで、高校時代で全てを出し尽くすという選手もいただろう。しかし、現代のアマチュア野球のレベルもかつてのものよりはるかに素晴らしく、甲子園(高校野球)で輝けるほどの才能を持った選手が卒業しても暴れられる環境は整っていると言っていいたい。才能の目を高校時代で摘み取っていいのだろうか。今回の私の主張はこれに尽きる。

### ・エンターテインメントのとしての肥大化

あえてネガティブな書き方をしたが、結局は注目度の高さが他方アマチュアスポーツと比べて群を抜いているということだ。それゆえ一挙手一投足にも注目が高まる。だが、彼らがしているのは「部活動」にほかならない。注目するなというのは到底無理な話だとは思いますが、意外と見落としているのではないだろうか。

## 5. おわりに

途中過激な発言もありつつ長々と語ってきたが、私は高校野球が好きだ。異質さと形容して述べた事柄も高校野球の醍醐味の一つであると考えている。ただ、魅力というものは時代とともに少しは移り変わるもので、今がその時なのかもしれないとも考えている。また、現時点では1試合単位の投球制限は現時点では難しそうだ。私は密かに1大会単位で投球制限をするという案を考えている。皆様も時代に合ったルールを考えてみてはいかがだろうか。今年も高校野球の季節がやって来る。ぜひ色々な視点で高校野球を捉え、より好きになっていただくことを心から願っている。